

## 【資料B：平成20・21年版学習指導要領に基づく

### 「評価規準の作成，評価方法の工夫改善のための参考資料（高等学校）」

#### 目次

学習評価に関する基礎事項	1
第1編 総説	3
Ⅰ. 新しい学習指導要領を踏まえた学習評価の基本的な考え方はどのようなものか。	5
1 学習評価の基本的な考え方	
2 指導要録における観点別学習状況，評定などの記録	
Ⅱ. 目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うことは高等学校の生徒にどのようなメリットがあると考えられるか。	9
1 全ての生徒に確かな学力を身に付けさせる	
2 生徒の学習意欲を向上させる	
3 大学等が多様な資質能力を有する生徒を求めることに応え，生徒の様々な進路希望の実現となる	
4 高等学校卒業生についての高等学校側からの質の保証となる	
Ⅲ. 目標に準拠した評価を進めていくに際して，評価規準の設定等はどのようにしたらよいのか。	11
1 評価規準とは何か	
2 評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例について	
Ⅳ. 実際に評価を行うに際しての方法はどのようにしたらよいか，その工夫改善はどのように進めたらよいか。	14
1 評価方法について	
2 評価時期等の工夫について	
3 各学校における指導と評価の工夫改善について	
4 第2編の資料で紹介する評価方法等の事例の特徴	
第2編 地理歴史科における評価規準の作成，評価方法等の工夫改善	21
第1章 教科目標，評価の観点及びその趣旨	23
1 教科目標	
2 評価の観点及びその趣旨	
第2章 世界史B	25
1 目標	
2 評価の観定の趣旨	
3 内容のまとめ	
4 内容のまとめごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例	
5 評価に関する事例	37
（1）世界史における観点別評価について	
（2）評価規準の設定について	
事例 ヨーロッパの拡大と大西洋世界	
<b>キーワード</b> 思考・判断・表現，資料活用の技能の評価	

第3章 日本史B	……49
1 目標	
2 評価の観点の趣旨	
3 内容のまとめ	
4 内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例	
5 評価に関する事例	……62
(1) 日本史における観点別評価について	
(2) 評価規準の設定について	
事例 近代産業の発展と資本主義の確立	
<b>キーワード</b> 指導の計画から評価の総括まで、資料活用の技能の評価	
第4章 地理B	……75
1 目標	
2 評価の観点の趣旨	
3 内容のまとめ	
4 内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例	
5 評価に関する事例	……88
(1) 地理における観点別評価について	
(2) 評価規準の設定について	
事例 なぜ、中華人民共和国は急激な経済成長を遂げているのだろう	
<b>キーワード</b> 効率的な評価の実施	
(参考資料)	……99
1 評価規準，評価方法等の工夫改善に関する調査研究について（平成22年4月14日，国立教育政策研究所長裁定）	
2 評価規準，評価方法等の工夫改善に関する調査研究協力者	
3 小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（平成22年5月11日付け文部科学省初等中等教育局長通知）（抄）	

※本冊子では，改訂後の常用漢字表（平成22年11月30日内閣告示）に基づいて表記しています。（学習指導要領及び初等中等教育局長通知等の引用部分を除く）

# 第1編 総説

本編では、新しい学習指導要領を踏まえた学習評価を進めていくに際してのポイント等を4点に分けて記述している。

## I. 新しい学習指導要領を踏まえた学習評価の基本的な考え方はどのようなものか。

国は、各学校や設置者の参考となるよう、学習指導要領の改訂ごとに、その趣旨を反映した学習評価の基本的な考え方を示すとともに、指導要録に記載する事項等を提示してきた。

平成25年度入学生から年次進行で実施(数学、理科は平成24年度入学生から年次進行で実施)される高等学校学習指導要領については、以下の1及び2のとおり示されている。

### 1 学習評価の基本的な考え方

平成22年3月に中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会報告「児童生徒の学習評価の在り方について」(以下「報告」という。)において次のとおり示されている。

※「報告」の全文は、文部科学省ホームページに掲載

([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/gaiyou/attach/1292216.htm))

#### (1) 小・中・高等学校における学習評価の改善に係る基本的な考え方

- ①目標に準拠した評価による観点別学習状況の評価や評定の着実な実施(学習評価の在り方の大枠は維持し、深化を図る。)
- ②学力の重要な要素を示した新しい学習指導要領等の趣旨の反映
- ③学校や設置者の創意工夫を生かす現場主義を重視した学習評価の推進

#### (2) 高等学校における学習評価についての基本的な考え方

- 小・中学校の学習評価では観点別学習状況の評価の着実な浸透が見られるが、高等学校の学習評価では、観点別学習状況の評価の趣旨を踏まえた学習評価を行い、授業の改善につなげるよう努力している学校がある一方で、ペーパーテストを中心としていわゆる平常点を加味した、成績付けのための評価にとどまっている学校もあるとの指摘がある。

※文部科学省が平成15年度及び平成21年度に教師と保護者に対して実施した学習指導と学習評価に関する意識調査の結果より

- 高等学校においても、学習指導と学習評価を一体的に行うことにより、生徒一人一人に学習内容の確実な定着を図り、授業の改善に寄与するとともに学習評価の重要性は同様であり、学習評価の前提となる指導と評価の計画や、観点に対応した生徒一人一人の学習状況を生徒や保護者に適切に伝えていくなど、学習評価の一層の改善が求められる。
- 高等学校においても、学校教育法や新しい学習指導要領を踏まえ、基礎的・基本的な知識・技能に加え、思考力・判断力・表現力等主体的に学習に取り組む態度に関する観点についても評価を行うなど、観点別学習状況の評価の実施を推進し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。
- 高等学校における教科・科目の評価の観点は、小・中学校との連続性に配慮しつつ、新しい学習指導要領の趣旨に沿って整理して設定することが適当である。
- 学習評価は、生徒の学習状況を検証し、結果の面から教育水準の維持向上を保障する機能を有するものである。したがって、学校が地域や生徒の実態を踏まえて設定した観点別学習状況の評価規準や評価方法等を明示するとともに、それらに基づき学校において適切な評価を行うことなどにより、高等学校教育の質の保証を図ることが求められる。

## 2 指導要録における観点別学習状況，評定などの記録

文部科学省は、「報告」を踏まえ、文部科学省初等中等教育局長通知「小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について」（以下「改善通知」という。）を発出（平成22年5月11日付け）し、各設置者による指導要録の様式の決定や各学校における指導要録の作成の参考となるよう、学習評価を行うに当たっての配慮事項、各教科・科目等の学習の記録など各欄の記入方法を示すとともに、各学校における指導要録の作成に当たっての配慮事項等を示した。

この「改善通知」の主な内容は次のとおりである。

※「改善通知」は、本資料末尾の参考資料及び文部科学省ホームページに掲載  
 ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/nc/1292898.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/1292898.htm))

### (1) 学習評価の改善に関する基本的な考え方について

学習評価を通じて、学習指導の在り方を見直すことや個に応じた指導の充実を図ること、学校における教育活動を組織として改善することが重要であり、新しい学習指導要領の下での学習評価の改善を図っていくためには以下の基本的な考え方に沿って学習評価を行うことが必要である。

- ①きめの細かな指導の充実や児童生徒一人一人の学習の確実な定着を図るため、学習指導要領に示す目標に照らしてその実現状況を評価する、目標に準拠した評価を引き続き着実に実施すること。
- ②新しい学習指導要領の趣旨や改善事項等を学習評価において適切に反映すること。
- ③学校や設置者の創意工夫を一層生かすこと。

## (2) 学習評価における観点について

新しい学習指導要領を踏まえ、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」及び「知識・理解」に評価の観点を整理し、各教科等の特性に応じて観点を示している。設置者や学校においては、これに基づく適切な観点を設定する必要がある。

「改善通知」に示された評価の観点の趣旨については、以下のように整理することができる。

### ①「関心・意欲・態度」

「関心・意欲・態度」の観点は、これまでと同様、各教科の学習に即した関心や意欲、学習への態度等を対象としたものであり、その趣旨に変更はない。

### ②「思考・判断・表現」

「思考・判断・表現」の観点のうち「表現」については、基礎的・基本的な知識・技能を活用しつつ、各教科の内容に即して考えたり、判断したりしたことを、児童生徒の説明・論述・討論などの言語活動等を通じて評価することを意味している。

つまり「表現」とは、これまでの「技能・表現」で評価されていた「表現」ではなく、思考・判断した過程や結果を言語活動等を通じて児童生徒がどのように表出しているかを内容としている。

### ③「技能」

「技能」の観点では、従前の「技能・表現」が対象としていた内容を引き継ぐことになる。これまで「技能・表現」については、例えば地理歴史科では資料から情報を収集・選択して、読み取ったりする「技能」と、それらを用いて図表や作品などにまとめたりする際の「表現」とをまとめて「技能・表現」として評価してきた。

今回の改訂で設定された「技能」については、これまで「技能・表現」として評価されていた「表現」をも含む観点として設定されることとなった。

### ④「知識・理解」

「知識・理解」の観点は、これまでと同様、各教科において習得した知識や重要な概念を理解しているかどうかを内容としたものであり、その趣旨に変更はない。

(3) 高等学校における学習評価について

引き続き観点別学習状況の評価を実施し、きめの細かい学習指導と生徒一人一人の学習の確実な定着を図っていく必要がある。

(4) 各教科・科目の評定の記入方法について

高等学校生徒指導要録における評定の記入方法は次のとおりである。

[各教科・科目等の学習の記録]

(1) 各教科・科目の評定

学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らして、その実現状況を総括的に評価し、次のように区別して記入する。

「十分満足できるもののうち、特に程度が高い」状況と判断されるもの	: 5
「十分満足できる」状況と判断されるもの	: 4
「おおむね満足できる」状況と判断されるもの	: 3
「努力を要する」状況と判断されるもの	: 2
「努力を要すると判断されるもののうち、特に程度が低い」状況と判断されるもの	: 1

評定に当たっては、知識や技能のみの評価など一部の観点到偏した評定が行われることのないように、「関心・意欲・態度」、「思考・判断・表現」、「技能」及び「知識・理解」といった観点による評価を十分踏まえながら評定を行っていくとともに、評定が教師の主観に流れて妥当性や信頼性等を欠くことのないよう学校として留意する。

その際、「改善通知」では、各教科の評価の観点及びその趣旨を示しているため、これらを十分踏まえながらそれぞれの科目の狙いや特性を勘案して具体的な評価規準を設定するなど評価の在り方を工夫する。

## Ⅱ. 目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うことは高等学校の生徒にどのようなメリットがあると考えられるか。

### 1 全ての生徒に確かな学力を身に付けさせる

現在、高等学校には多様な特性をもった生徒が在籍しており、進路希望や興味・関心が多様化する中、全ての生徒に確かな学力を身に付けさせるためには、適切な目標を設定して日々指導を工夫するとともに、生徒の実現状況を確実に把握して、さらにその後の指導に生かすことが必要である。

例えば、実現状況がより良好でない生徒には、知識や技能を身に付けさせることを重視しつつ、適宜生徒の興味を引く課題を提示して知識や技を活用する指導が考えられる。一方、実現状況が良好な生徒には、はじめに課題を提示してその課題を解決する中で知識や技能を身に付けさせる導が考えられる。このような生徒の実現状況に基づいた指導の工夫を行うには、生徒の実現状況を目標に照らして分析的に捉えることが必要であり、それには目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うことが適している。

また、目標に準拠した評価を行うために作成された評価規準を通して、生徒は学習の目当てや学習の重点を明確に知ることができる。そして、学習の後の教師からの評価によって、今後どのような点に注意して学習すべきかを考えることにもなるので、生徒の学習を改善することにもつながる。

### 2 生徒の学習意欲を向上させる

これまでの評価は「評定をして終わり」の印象が強かったが、目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うことは生徒一人一人の実現状況を確実に把握することが前提であり、それゆえ生徒一人一人の進歩したところやほかと比べて優れたところなどを把握することが重視される。それら（例えば、「技能」の評価では十分でなくても、グループで問題を解決する際、斬新な考えを積極的に述べ、問題の解決に大いに寄与している、など）を適宜生徒に伝えることで学習意欲を向上させることにもつながる。

### 3 大学等が多様な資質能力を有する生徒を求めることに応え、生徒の様々な進路希望の実現となる

今後の知識基盤社会、グローバル社会においては、知識や技能だけでなく、それらを活用して課題を見いだし、解決するための思考力・判断力・表現力、コミュニケーション能力、意欲等が重視され、大学や企業等では、思考力をはじめとした多面的な観点から学生や社員を求める取組が行

われるようになってきている。例えば、平成24年度大学入学者選抜でA  
O入試(アドミッション・オフィス入試)を行う大学・学部数は69大学、  
172学部(文部科学省調べ)となっている。

知識や技能を身に付けているだけではなく、それらを活用して問題を解  
決したり、自分の考えを的確に表現したりする力を適切に評価し伸ばしてい  
くことは、大学等の高等学校卒業生の受入れ側において生徒たちに多様な資  
質能力を求めていることに応えていくことにもなり、生徒の様々な進路希望  
の実現に役立つこととなる。

#### 4 高等学校卒業生についての高等学校側からの質の保証となる

目標に準拠した学習評価により観点別学習状況の評価を行うことは、①  
生徒に身に付けさせる資質や能力を目標設定段階で明確にすることにつな  
がること、授業において評価の機能を生かしながら意図的計画的な授業が  
可能になること、これを通じて教育課程のPDCAサイクルの確立に寄与  
すること、②高等学校卒業段階での当該生徒の有する意欲や様々な資質能  
力、将来の可能性等を適切に評価することとなり、高等学校卒業生につい  
ての高等学校における質の保証となる。

### Ⅲ. 目標に準拠した評価を進めていくに際して、評価規準の設定等はどのようにしたらよいのか。

#### 1 評価規準とは何か

目標に準拠した評価を着実に実施するためには、各教科・科目の目標だけでなく、領域や内容項目レベルの学習指導の狙いが明確になっていること、学習指導の狙いが生徒の学習状況として実現されたとはどのような状態になっているかが具体的に想定されていることが必要である。

このような状況を具体的に示したものが評価規準であり、各学校において設定するものである。

各学校において、学習評価を行うために評価規準を設定することは、生徒の学習状況を判断する際の見安が明らかになり、指導と評価を着実に実施することにつながる。

#### (参考) 評価規準の設定 (抄)

(文部省「小学校教育課程一般指導資料」(平成5年9月)より)

新しい指導要録(平成3年改訂)では、観点別学習状況の評価が効果的に行われるようにするために、「各観点ごとに学年ごとの評価規準を設定するなど工夫を行うこと」と示されています。

これまでの指導要録においても、観点別学習状況の評価を適切に行うため、「観心の趣旨を学年別に具体化することなどについて工夫を加えることが望ましいこと」とされており、教育委員会や学校では目標の達成の度合いを判断するための基準や尺度などの設定について研究が行われてきました。

しかし、それらは、ともすれば知識・理解の評価が中心になりがちであり、また「目標を十分達成(+)」、「目標をおおむね達成(空欄)」及び「達成が不十分(-)」ごとに詳細にわたって設定され、結果としてそれを単に数量的に処理することに陥りがちであったとの指摘がありました。

今回の改訂においては、学習指導要領が目指す学力観に立った教育の実践に役立つようにすることを改訂方針の一つとして掲げ、各教科の目標に照らしてその実現の状況の評価する観点別学習状況を各教科の学習の評価の基本に据えることとしました。したがって、評価の観点についても、学習指導要領に示す目標との関連を密にして設けられています。

このように、学習指導要領が目指す学力観に立つ教育と指導要録における評価とは一体のものであるとの考え方に立って、各教科の目標の実現の状況を「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現(又は技能)」及び「知識・理解」の観点ごとに適切に評価するため、「評価規準を設定する」ことを明確に示しているものです。

「評価規準」という用語については、先に述べたように、新しい学力観に立って子供たちが自ら獲得し身に付けた資質や能力の質的な面、すなわち、学習指導要領の目標に基づく幅のある資質や能力の育成の実現状況の評価を目指すという意味から用いたものです。

また、学習評価の工夫改善を進めるに当たっては、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすとともに、学校における教育活動全体の改善に結び付けることが重要である。その際、学習指導の過程や学習の結果を継続的、総合的に把握することが必要である。

そのためには、評価規準を適切に設定するとともに、評価方法の工夫改善を進めること、評価結果について教師同士で検討すること、実践事例を着実に継承していくこと、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図ること等に、校長のリーダーシップの下で、学校として組織的・計画的に取り組むことが必要である。

以上のような考え方を踏まえ、本資料第2編では、各学校において評価規準を設定する際の参考となるよう、「評価規準に盛り込むべき事項」及び「評価規準の設定例」を掲載している。

各学科に共通する教科	評価規準に盛り込むべき事項，評価規準の設定例及び評価に関する事例の作成科目
国語	国語総合
地理歴史	世界史B，日本史B，地理B
公民	現代社会，倫理，政治・経済
数学	数学I
理科	物理基礎，化学基礎，生物基礎，地学基礎
保健体育	体育，保健
芸術	音楽I，美術I，工芸I，書道I
外国語	コミュニケーション英語I
家庭	家庭総合
情報	情報の科学

## 2 評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例について

「評価規準に盛り込むべき事項」は、新しい学習指導要領の各教科の目標、各科目の目標及び内容、「改善通知」で示されている各教科の評価の観点及びその趣旨を踏まえて、科目の評価の観点の趣旨を作成し、これらを基に内容のまとまりごとに作成している。

「評価規準の設定例」は、「評価規準に盛り込むべき事項」をより具体化したものであり、原則として、新しい学習指導要領の各教科の目標、各科目の目標及び内容のほかに、当該部分の学習指導要領解説（文部科学省刊行）の記述を基に作成している。

なお、「評価規準に盛り込むべき事項」及び「評価規準の設定例」は、評価の観点別に「おおむね満足できる」状況を示すものである。したがって、この状況を実現していれば「おおむね満足できる」状況であり、実現していなければ「努力を要する」状況となる。さらに、「おおむね満足できる」状況と判断される生徒の学習状況について、質的な高まりや深まりをもっていると判断されるとき、「十分満足できる」状況という評価になる。

「改善通知」は、高等学校における観点別学習状況の評価として、「十分満足できる」状況（A）、「おおむね満足できる」状況（B）、「努力を要する」状況（C）によって行うことを明示しているわけではないが、基本的な考え方は小・中学校と同じものになると考え、後に示す評価の事例もこれによっている。

【参考】「改善通知」に示された中学校生徒指導要録における観点別学習状況の記入方法

(学習指導要領に示す必修教科の取扱いは次のとおり)

[各教科の学習の記録]

I 観点別学習状況（小学校児童指導要録と同じ）

新しい学習指導要領に示す各教科の目標に照らして、その実現状況を観点ごとに評価し、次のように区別して記入する。

「十分満足できる」状況と判断されるもの : A

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの : B

「努力を要する」状況と判断されるもの : C

高等学校では、学習指導要領の第2章以下に示していない事項を加えて指導することができることや、特に必要がある場合には、第2章及び第3章に示す教科及び科目の目標の趣旨を損なわない範囲内で、各教科・科目の内容に関する事項について、基礎的・基本的な事項に重点を置くなどその内容を適切に選択して指導することができる。

このため、高等学校では、「学習指導要領に示す各教科・科目の目標に基づき、学校が地域や生徒の実態に即して定めた当該教科・科目の目標や内容に照らしてその実現状況を評価する」ことになっており、各学校ではこの点も十分踏まえ、第2編や各教育委員会が作成した学習評価関係資料を参考にしつつ、適切な評価規準を設定することが期待される。

## IV. 実際に評価を行うに際しての方法はどのようにしたらよいか，その工夫改善はどのように進めたらよいか。

### 1 評価方法について

評価方法については，各学校で各教科・科目の学習活動の特質，評価の観点や評価規準，評価の場面や生徒の発達の段階に応じて，観察，生徒との対話，ノート，ワークシート，学習カード，作品，レポート，ペーパーテスト，質問紙，面接などの様々な評価方法の中から，その場面における生徒の学習状況を的確に評価できる方法を選択していくことが必要である。

加えて，生徒による自己評価や生徒同士の相互評価を工夫することも考えられる。

評価を適切に行うという点のみでいえば，できるだけ多様な評価を行い，多くの情報を得ることが重要であるが，他方，このことにより評価に追われてしまえば，十分に指導ができなくなるおそれがある。生徒の学習状況を適切に評価し，その評価を指導に生かす点に留意する必要がある。

なお，ペーパーテストは，評価方法の一つとして有効であるが，ペーパーテストにおいて得られる結果が，目標に準拠した評価における学習状況の全てを表すものではない。

そこで，例えば，ワークシート等への記述内容は，「知識・理解」の評価だけでなく，「関心・意欲・態度」，「思考・判断・表現」，「技能」の評価にも活用することが可能であり，生徒の資質や能力を多面的に把握できるように工夫し，活用することが考えられる。

### 2 評価時期等の工夫について

「報告」では，評価時期に関して以下の2点が述べられている。

- ・授業改善のための評価は日常的に行われることが重要である。一方で，指導後の生徒の状況を記録するための評価を行う際には，単元等のある程度長い区切りの中で適切に設定した時期において「おおむね満足できる」状況等にあるかどうかを評価することが求められる。
- ・「関心・意欲・態度」については，表面的な状況のみに着目することにならないよう留意するとともに，教科の特性や学習指導の内容等も踏まえつつ，ある程度長い区切りの中で適切な頻度で「おおむね満足できる」状況等にあるかどうかを評価するなどの工夫を行うことも重要である。

各学校で年間指導計画を検討する際、それぞれの単元（題材）において、観点別学習状況の評価に係る最適の時期や方法を観点ごとに整理することが重要である。これにより、評価すべき点を見落とししていないかを確認するだけでなく、必要以上に評価の機会を設けて評価資料の収集・分析に多大な時間を要するような事態を防ぐことができ、各学校において効果的・効率的な学習評価を行うことにつながると考えられる。

さらに、各学校においては、評価が学期末などに偏ることのないよう、評価の時期を工夫したり、学習の過程における評価を一層重視したりするなど、評価の場面についても工夫することが考えられる。

### 3 各学校における指導と評価の工夫改善について

#### (1) 指導と評価の一体化

新しい学習指導要領は、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力、判断力、表現力等をバランスよく育てることを重視している。各教科・科目の指導に当たっては、学習意欲を向上させ、生徒の主体的な活動を生かしながら、目標の確実な実現を目指す指導の在り方が求められる。

このバランスのとれた学力を育成するためには、学習指導の改善を進めると同時に、学習評価においては、各観点ごとの評価をバランスよく実施することが必要である。

さらに、学習評価の工夫改善を進めるに当たっては、学習評価をその後の学習指導の改善に生かすとともに、学校における教育活動全体の改善に結び付けることが重要である。その際、学習指導の過程や学習の結果を継続的、総合的に把握することが必要である。

各学校では、生徒の学習状況を適切に評価し、評価を指導の改善に生かすという視点を一層重視し、教師が指導の過程や評価方法を見直して、より効果的な指導が行えるよう指導の在り方について工夫改善を図っていくことが重要である。

#### (2) 学習評価の妥当性、信頼性等

「報告」では、各学校や設置者の創意工夫を生かし、現場主義を重視した学習評価として、各学校では、組織的・計画的な取組を推進し、学習評価の妥当性、信頼性等を高めるよう努めることが重要であるとされている。

この学習評価の「妥当性」は、評価結果が評価の対象である資質や能力を適切に反映しているものであることを示す概念とされており、「妥当性」の確保のためには、評価結果と評価しようとした目標の間に適切な関連があること（学習評価が学習指導の目標に対応するものとして行われていること）、評価方法が評価の対象である資質や能力を適切に把握するものとしてふさわしいものであること等が求められるとされている。

また、「改善通知」では、学校や設置者において、学習評価の妥当性、信頼性等を高める取組を求めている。妥当性、信頼性等を高めるためには、各学校において、次のような取組が有効と考えられる。

まず、学習評価を進めるに当たっては、指導の目標及び内容と対応した形で評価規準を設定することや評価方法を工夫する必要がある。

特に、評価方法を検討する際には、評価の観点で示される資質や能力等を評価するのにふさわしい方法を選択することが、評価の妥当性、信頼性等を高めることになる。

また、評価方法を評価規準と組合わせて設定することが必要であり、評価規準と対応するように評価方法を準備することによって、評価方法の妥当性、信頼性等が高まるものと考えられる。

### (3) 学校全体としての組織的・計画的な取組

#### ①教師の共通理解と力量の向上

学校全体として評価についての力量、妥当性、信頼性等を高めるためには、校長のリーダーシップの下で組織的・計画的に取り組み、学校としての評価の方針、方法、体制、評価結果などについて、日頃から教師間の共通理解を図り、授業研究等を通じ教師一人一人の力量の向上を図る必要がある。これにより担当教科、経験年数等に左右されず、教師が共通の認識をもって評価に当たることができるようにすることが重要である。

さらに、複数の教師で、どのように学習評価を進めれば指導に生かす評価の充実が図れるのか、教師にとって過大な負担とならないかなどについて確認し合うことが、効果的で効率的な評価を行うことにつながる。

以上のことを学校として組織的に実施するために、校内研究・研修の在り方を一層工夫する必要がある。

#### ②保護者や生徒への情報の提供

「改善通知」では、保護者や生徒に対して、学習評価に関する仕組み等について事前に説明したり、評価結果の説明を充実したりするなどして学習評価に関する情報をより積極的に提供することも重要とされている。

どのような評価規準、評価方法により評価を行ったのかといった情報を保護者や生徒に分かりやすく説明し、共通理解を図ることが重要となる。信頼される評価を行うためには、評価が目的に応じて、保護者や生徒などの関係者の間でおおむね妥当であると判断できるものであることも重要な意味をもつ。

## 4 第2編の資料で紹介する評価方法等の事例の特徴

### (1) 各科目の事例について

#### ①単元（題材）の評価に関する事例の提示

本資料では、事例の提示に当たって、以下の5点に留意した。

- 1) 1単元（題材）における指導と評価の計画を示しながら、当該科目での各観点の特徴を踏まえた評価の留意点を説明している。
- 2) 「単元（題材）の評価規準」などを示すとともに、それらがどの「評価規準に盛り込むべき事項」や「評価規準の設定例」を参考に設定されたかが分かるようにしている。
- 3) 「指導と評価の計画」の中に、当該単元（題材）において、どのような評価方法を選択し、組み合わせたかが分かるようにしている。  
また、必要に応じて、ワークシートや作品などの評価方法として活用したものを資料として提示したり、具体的に工夫した点についての説明を加えたりして、多様な方法を紹介している。
- 4) 「おおむね満足できる」状況、「十分満足できる」状況、「努力を要する」状況と判断した生徒の具体的な状況の例などを示している。特に、「十分満足できる」状況という評価になるのは、生徒が実現している学習の状況が質的な高まりや深まりをもっているとは判断されるときであるが、それは具体的にはどのような状況であるかを示している。  
また、「努力を要する」状況と判断した生徒への指導の手立てや働きかけを示したり、「努力を要する」状況に至ることのないよう配慮した点を示している。
- 5) 当該単元（題材）において、観点ごとにどのような総括を行ったのかについて、その考え方や具体例などを示している。

#### ②効果的・効率的な評価

ある単元（題材）において、りにも多くの評価規準を設定したり、多くの評価方法を組み合わせたりすることは、評価を行うこと自体が大きな負担となり、その結果を後の学習指導の改善に生かすことも十分できなくなるおそれがある。

例えば、1単位時間の中で四つの観点全てについて評価規準を設定し、その全てを評価し学習指導の改善に生かしていくことは、現実的には困難であると考えられる。教師が無理なく生徒の学習状況を的確に評価できるように評価規準を設定し、評価方法を選択することが必要である。

また、評価の実践を踏まえ、必要に応じて評価規準や評価方法について検討し、見直しを行っていくことも効果的である。

本資料では、効果的・効率的な評価を進める上で参考となるよう以下の3点に配慮した。

- 1) 評価結果を記録する機会を過度に設定することのないよう、各観点

で1単元（題材）内で平均すると1単位時間当たり1～2回の評価回数となるよう指導と評価の計画を示した。

- 2) ノートやレポート，ワークシート，作品など，授業後に教師が確認しながら評価を行えるような方法と，授業中の見取りを適切に組み合わせ，全員の学習状況を適切に見取りつつ，それぞれの生徒の特性にも配慮した評価方法が採用できるよう配慮した。
- 3) 評価が円滑に実施できていないと教師が捉えている観点をはじめとして，それぞれの観点において，どのような生徒の姿や記述等を評価対象とすればよいかを明確に示した。

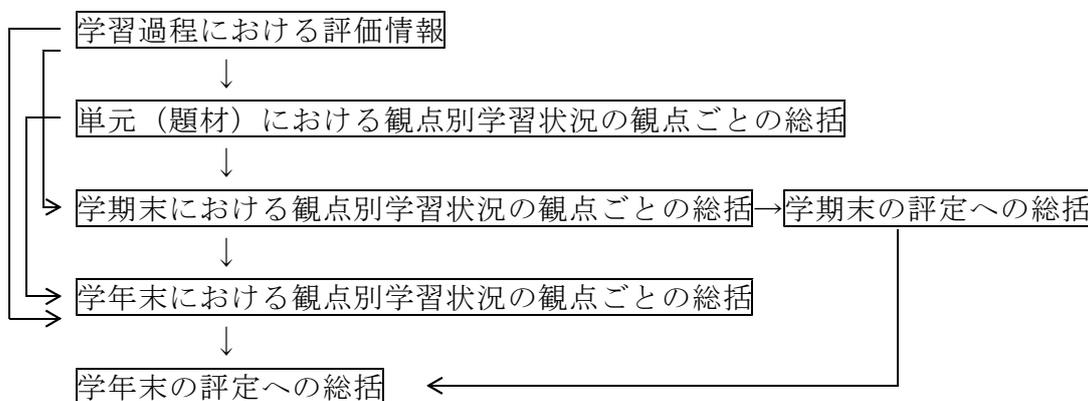
### ③総括

観点別学習状況については，個々の評価規準に照らして学習の実現状況を評価し，得られた評価結果を基に，単元（題材）全体の実現状況をまとめ，さらに学期や学年といった単位で学習の実現状況をまとめていくことになる。

したがって，観点別学習状況の評価のための総括の場面としては，

- 1) 単元（題材）における観点ごとの評価の総括
- 2) 学期末における観点ごとの評価の総括
- 3) 学年末における観点ごとの評価の総括

の3段階であることが多いと考えられ，具体的な総括の流れとしては，以下の図に示したように，幾つかの例が考えられる。



#### 1) 観点別学習状況の評価の観点ごとの総括

単元（題材）における観点ごとの総括は，科目ごとに事例の中でも取り上げている。学期末や学年末における観点ごとの評価の総括，評定への総括は，「学習評価の工夫改善に関する調査研究」（平成16年3月，国立教育政策研究所）を基に考え方を示している。

なお，各学校における総括の具体的な考え方や方法等は，これらを参考にしつつ，より一層工夫していくことが必要である。

#### ア 単元（題材）における観点ごとの評価の総括

単元（題材）においては、学習過程における評価情報を観点ごとに総括する。観点ごとの評価記録が複数ある場合の総括の方法としては、次のようなものが考えられる。

##### （ア）評価結果の A，B，C の数

ある観点で幾つかのまとまりごとに何回か行った評価結果の A，B，C の数が多いものが、その観点の学習の実現状況を最もよく表しているとする考え方に立つ総括方法である。例えば、3 回評価を行った結果が「ABB」ならば B と総括する。なお、「AABB」の総括結果を A とするか B とするかなど、同数の場合や三つの記号が混在する場合の総括の仕方をあらかじめ決めておく必要がある。

##### （イ）評価結果の A，B，C を数値に表す

ある観点で幾つかのまとまりごとに何回か行った評価結果 A，B，C を、例えば、 $A=3$ ， $B=2$ ， $C=1$  のように数値によって表して、合計したり、平均したりすることで総括する方法である。例えば、総括の結果を B とする判断の基準を  $[1.5 \leq \text{平均値} \leq 2.5]$  とすると、「ABB」の平均値は、約  $2.3 [(3+2+2) \div 3]$  で総括結果は B となる。

このほか、本資料では、観点によって特定の評価機会における結果について重み付けした例なども紹介している。

#### イ 学期末における観点ごとの評価の総括

学期末における観点ごとの評価の総括は、単元（題材）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合と、学習過程における評価情報から総括する場合が考えられる。

なお、総括の方法は、ア（ア）及び（イ）と同様であると考えられる。

#### ウ 学年末における観点ごとの評価の総括

学年末における観点ごとの総括については、学期末に総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合と、単元（題材）ごとに総括した観点ごとの評価結果を基に行う場合などが考えられる。

なお、総括の方法は、ア（ア）及び（イ）と同様であると考えられる。

## 2) 観点別学習状況の評価の評定への総括

評定が各教科・科目の目標や内容に照らして学習の実現状況を総括的に評価するものであるのに対し、観点別学習状況の評価は各教科・科目の目標や内容に照らして学習の実現状況を分析的に評価するものであり、観点別学習状況の評価が評定を行うための基本的な要素となる。

なお、評定への総括の場面は、学期末や学年末などに行われることが多い。学年末に評定へ総括する場合には、学期末に総括した評定の結果を基にする場合と、学年末に観点ごとに総括した評価の結果を基にする場合が考えられる。

観点別学習状況の評価の評定への総括は、各観点の評価結果をA, B, Cの組合せ、又は、A, B, Cを数値で表したものに基づいて総括し、その結果を高等学校では5段階で表す。

A, B, Cの組合せから評定に総括する場合、各観点とも同じ評価がそろう場合は、「AAAA」であれば4又は5、「BBBB」であれば3、「CCCC」であれば2又は1とするのが適当であると考えられる。それ以外の場合は、各観点のA, B, Cの数の組合せから適切に評定する必要がある。

なお、観点別学習状況の評価結果はA, B, Cなどで表されるが、そこで表された学習の実現状況には幅があるため、機械的に評定を算出することは適当ではない場合も予想される。

また、評定は5, 4, 3, 2, 1という数値で表されるが、これを生徒の学習の実現状況を五つに分類したものとして捉えるのではなく、常にこの結果の背景にある生徒の具体的な学習の実現状況を思い描き、適切に捉えることが大切である。

評定への総括に当たっては、このようなことも十分に検討する必要がある。

そして、評価に対する妥当性、信頼性等を高めるために、各学校では観点別学習状況の評価の観点ごとの総括及び評定への総括の考え方や方法について共通理解を図り、生徒及び保護者に十分説明し理解を得ることが大切である。

## 第2編 地理歴史科における評価規準の作成， 評価方法等の工夫改善

### 第1章 教科目標，評価の観点及びその趣旨

#### 1 教科目標

我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての理解と認識を深め，国際社会に主体的に生き平和で民主的な国家・社会を形成する日本国民として必要な自覚と資質を養う。

#### 2 評価の観点及びその趣旨

学習指導要領を踏まえ，地理歴史科の特性に応じた評価の観点及びその趣旨は以下のとおりである。

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用 of 技能	知識・理解
歴史的・地理的事象に対する関心と課題意識を高め，意欲的に追究するとともに，国際社会に主体的に生き国家・社会を形成する日本国民としての責務を果たそうとする。	歴史的・地理的事象から課題を見だし，我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色を世界的視野に立って多面的・多角的に考察し，国際社会の変化を踏まえ公正に判断して，その過程や結果を適切に表現している。	歴史的・地理的事象に関する諸資料を収集し，有用な情報を適切に選択して，効果的に活用している。	我が国及び世界の形成の歴史的過程と生活・文化の地域的特色についての基本的な事柄を理解し，その知識を身に付けている。

## 第2章 世界史B

### 1 目標

世界の歴史の大きな枠組みと展開を諸資料に基づき地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解させ、文化の多様性・複合性と現代世界の特質を広い視野から考察させることによって、歴史的思考力を培い、国際社会に主体的に生きる日本国民としての自覚と資質を養う。

### 2 評価の観点の趣旨

学習指導要領を踏まえ、世界史Bの特性に応じた評価の観点の趣旨は以下のとおりである。

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
世界の歴史に対する関心と課題意識を高め、意欲的に追究するとともに、国際社会に主体的に生き国 家・社会を形成する 日本国民としての責 務を果たそうとする。	世界の歴史から課題を見だし、文化の多様性・複合性や現代世界の特質を多面的・多角的に考察し、国際社会の変化を踏まえ公正に判断して、その過程や結果を適切に表現している。	世界の歴史に関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	世界の歴史についての基本的な事柄を地理的条件や日本の歴史と関連付けながら理解し、その知識を身に付けている。

### 3 内容のまとめ

世界史Bにおいては、学習指導要領の内容の(1)、(2)、(3)、(4)、(5)を内容のまとめとした。

## 4 内容のまとめりごとの評価規準に盛り込むべき事項及び評価規準の設定例

### (1) 「(1) 世界史への扉」

#### 【学習指導要領の内容】

自然環境と人類のかかわり，日本の歴史と世界の歴史のつながり，日常生活にみる世界の歴史に 関わる適切な主題を設定し考察する活動を通して，地理と歴史への関心を高め，世界史学習の意義に気付かせる。

#### ア 自然環境と人類のかかわり

自然環境と人類のかかわりについて，生業や暮らし，交通手段，資源，災害などから適切な歴史的事例を取り上げて考察させ，世界史学習における地理的視点の重要性に気付かせる。

#### イ 日本の歴史と世界の歴史のつながり

日本と世界の諸地域の接触・交流について，人，もの，技術，文化，宗教，生活などから適切な歴史的事例を取り上げて考察させ，日本の歴史と世界の歴史のつながりに気付かせる。

#### ウ 日常生活にみる世界の歴史

日常生活にみる世界の歴史について，衣食住，家族，余暇，スポーツなどから適切な事例を取り上げて，その変遷を考察させ，日常生活からも世界の歴史が捉えられることに気付かせる。

#### 【「(1) 世界史への扉」の評価規準に盛り込むべき事項】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
自然環境と人類のかかわり，日本の歴史と世界の歴史のつながり，日常生活にみる世界の歴史に関わる主題を意欲的に考察し，地理と歴史への関心を高めようとしている。	主題設定した学習を通して，具体的様相や変遷などを考察し，その過程や結果を適切に表現している。	主題設定した学習を通して，事例の考察に必要な諸資料について，有用な情報を読み取ったり図表などにまとめたりしている。	主題設定した学習を通して，地理的視点の重要性，日本の歴史とのつながり，日常生活からも世界の歴史が捉えられることなどの世界史を学ぶ視点と，世界史学習の意義に気付いている。

【「(1) 世界史への扉」の評価規準の設定例】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<p>・ 自然環境と人類の関わりに着目し、生業や暮らし、交通手段、資源、災害などの歴史的事例を意欲的に考察し、地理と歴史への関心を高めようとしている。</p>	<p>・ 生業や暮らし、交通手段、資源、災害などの歴史的事例から自然環境と人類の関わりについて歴史的に考察するとともに、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・ 生業や暮らし、交通手段、資源、災害などの歴史的事例から自然環境と人類の関わりについて、必要な諸資料について、有用な情報を読み取ったり図表などにまとめたりしている。</p>	<p>・ 自然環境と人類のこれまでの活動との相互関係を地理的視野から捉え、世界史学習における地理的視点の重要性と世界史学習の意義に気付いている。</p>
<p>・ 日本と世界の諸地域の歴史と関係が深い、人、もの、技術、文化、宗教、生活などの事柄に着目し、相互の接触・交流に関わる歴史的事例を意欲的に考察し、地理と歴史への関心を高めようとしている。</p>	<p>・ 人、もの、技術、文化、宗教、生活などの歴史的事例から日本と世界の諸地域の接触・交流について歴史的に考察するとともに、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・ 人、もの、技術、文化、宗教、生活などの歴史的事例から日本の歴史と世界の歴史のつながりの考察に必要な諸資料について、有用な情報を読み取ったり図表などにまとめたりしている。</p>	<p>・ 日本と世界の諸地域の間で相互の接触・交流の結果もたらされ、現在まで受け継がれてきた日本と関係の深い事柄を通して、日本の歴史と世界の歴史のつながりと世界史学習の意義に気付いている。</p>
<p>・ 日常生活の中にある事柄に着目し、歴史的観点に立って取り上げた衣食住、家族、余暇、スポーツなどの事例の変遷などを意欲的に考察し、地理と歴史への関心を高めようとしている。</p>	<p>・ 歴史的観点に立って取り上げた衣食住、家族、余暇、スポーツなどの事例から日常生活にみる世界の歴史について、その起源や変遷などを考察するとともに、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・ 歴史的観点に立って取り上げた衣食住、家族、余暇、スポーツなどの事例から日常生活にみる世界の歴史の考察に必要な諸資料について、有用な情報を読み取ったり図表などにまとめたりしている。</p>	<p>・ 日常生活の中にある日本と世界の諸地域との接触・交流の軌跡や、生活・文化の地域的特色を通して、日常生活からも世界の歴史が捉えられることと世界史学習の意義に気付いている。</p>

## (2) 「(2) 諸地域世界の形成」

### 【学習指導要領の内容】

人類は各地の自然環境に適応しながら農耕や牧畜を基礎とする諸文明を築き上げ、やがてそれらを基により大きな地域世界を形成したことを把握させる。

#### ア 西アジア世界・地中海世界

西アジアと地中海一帯の地理的特質、オリエント文明、イラン人の活動、ギリシア・ローマ文明に触れ、西アジア世界と地中海世界の形成過程を把握させる。

#### イ 南アジア世界・東南アジア世界

南アジアと東南アジアの地理的特質、インダス文明、アーリヤ人の進入以後の南アジアの文化、社会、国家の発展、東南アジアの国家形成に触れ、南アジア世界と東南アジア世界の形成過程を把握させる。

#### ウ 東アジア世界・内陸アジア世界

東アジアと内陸アジアの地理的特質、中華文明の起源と秦・漢<sup>しん</sup>帝国、遊牧国家の動向、唐帝国と東アジア諸民族の活動に触れ、日本を含む東アジア世界と内陸アジア世界の形成過程を把握させる。

#### エ 時間軸からみる諸地域世界

主題を設定し、それに関連する事項を年代順に並べたり、因果関係で結び付けたり、地域世界ごとに比較したりするなどの活動を通して、世界史を時間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。

### 【「(2) 諸地域世界の形成」の評価規準に盛り込むべき事項】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
人類が自然環境に適応しながら築き上げた諸文明及び諸地域世界に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	世界各地に形成された諸文明及び諸地域世界の特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	世界各地に形成された諸地域世界の特質に関する諸資料を収集し、読み取ったり図表などにまとめたりにしている。	世界各地に形成された独自の地域世界の特質についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

【「(2) 諸地域世界の形成」の評価規準の設定例】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<p>・ 諸文明が自然環境に適応しながら築き上げられたことや、隣接する地域世界が相互に影響しあってきたことに対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。</p>	<p>・ 西アジア世界・地中海世界の形成過程及びオリエント文明やギリシア・ローマ文明の特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・ 諸文明の特質に関する資料から有用な情報を適切に選択して、関連する事項を年代順に並べたり、因果関係で結び付けたりするなどの活動を通して、世界史を時間的なつながりに着目して整理している。</p>	<p>・ 西アジア世界と地中海世界の形成過程についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。</p>
	<p>・ 南アジア世界・東南アジア世界の形成過程を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。</p>		<p>・ 南アジア世界と東南アジア世界の形成過程についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。</p>
	<p>・ 日本を含む東アジア世界・内陸アジア世界の形成過程及び中華文明や東アジア諸民族の特色を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。</p>		<p>・ 日本を含む東アジア世界と内陸アジア世界の形成過程についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。</p>
	<p>・ 諸地域世界の形成を時間的なつながりに着目して捉え、論理的に思考し適切に表現している。</p>		

### (3) 「(3) 諸地域世界の交流と再編」

#### 【学習指導要領の内容】

ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景に、諸地域世界の交流が一段と活発化し、新たな地域世界の形成や再編を促したことを把握させる。

#### ア イスラーム世界の形成と拡大

アラブ人とイスラーム帝国の発展、トルコ系民族の活動、アフリカ・南アジアのイスラーム化に触れ、イスラーム世界の形成と拡大の過程を把握させる。

#### イ ヨーロッパ世界の形成と展開

ビザンツ帝国と東ヨーロッパの動向、西ヨーロッパの封建社会の成立と変動に触れ、キリスト教とヨーロッパ世界の形成と展開の過程を把握させる。

#### ウ 内陸アジアの動向と諸地域世界

内陸アジア諸民族と宋の抗争、モンゴル帝国の興亡とユーラシアの諸地域世界や日本の変動に触れ、内陸アジア諸民族が諸地域世界の交流と再編に果たした役割を把握させる。

#### エ 空間軸からみる諸地域世界

同時代性に着目して主題を設定し、諸地域世界の接触や交流などを地図上に表したり、世紀ごとに比較したりするなどの活動を通して、世界史を空間的なつながりに着目して整理し、表現する技能を習得させる。

#### 【「(3) 諸地域世界の交流と再編」の評価規準に盛り込むべき事項】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景とした諸地域世界の交流と、新たな地域世界の形成や再編に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	諸地域世界の交流や新たな地域世界の形成過程及び地域世界間の交流が及ぼした影響を多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	諸地域世界の交流や新たな地域世界の特質に関する諸資料を収集し、読み取った図表などにまとめたりしている。	ユーラシアの海域及び内陸のネットワークを背景とした諸地域世界の交流と、新たな地域世界の形成や再編についての基本的な事柄を把握し、その知識を身に付けている。

【「(3) 諸地域世界の交流と再編」の評価規準の設定例】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<p>・イスラームの拡大と交流の活発化，ヨーロッパ世界の形成，内陸アジア諸民族の動向と諸地域世界の再編といったユーラシア規模での動きに対する関心を高め，意欲的に追究しようとしている。</p>	<p>・イスラーム世界の形成と拡大及びイスラームの特色を多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p> <p>-----</p> <p>・ヨーロッパ世界の形成と展開及びヨーロッパ文明の特色を多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p> <p>-----</p> <p>・内陸アジア諸民族が諸地域世界の交流と再編に果たした役割を多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p> <p>-----</p> <p>・諸地域世界の交流と再編を空間的なつながりに着目して捉え，論理的に思考し適切に表現している。</p>	<p>・諸地域世界の接触や交流に関する資料から有用な情報を適切に選択して，地図上に表したり，世紀ごとに比較したりするなどの活動を通して，世界史を空間的なつながりに着目して整理している。</p>	<p>・イスラーム世界の形成と拡大の過程についての基本的な事柄を把握し，その知識を身に付けている。</p> <p>-----</p> <p>・キリスト教とヨーロッパ世界の形成と展開の過程についての基本的な事柄を把握し，その知識を身に付けている。</p> <p>-----</p> <p>・内陸アジア諸民族が諸地域世界の交流と再編に果たした役割についての基本的な事柄を把握し，その知識を身に付けている。</p> <p>-----</p>

## (4) 「(4) 諸地域世界の結合と変容」

### 【学習指導要領の内容】

アジアの繁栄とヨーロッパの拡大を背景に、諸地域世界の結合が一層進展したこととともに、主権国家体制を整え工業化を達成したヨーロッパの進出により、世界の構造化が進み、社会の変容が促されたことを理解させる。

#### ア アジア諸地域の繁栄と日本

西アジア・南アジアのイスラーム諸帝国や東南アジア海域の動向、明・清<sup>みん しん</sup>帝国と日本や朝鮮などとの関係を扱い、16世紀から18世紀までのアジア諸地域の特質とその中での日本の位置付けを理解させる。

#### イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界

ルネサンス、宗教改革、主権国家体制の成立、世界各地への進出と大西洋世界の形成を扱い、16世紀から18世紀までのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アフリカとの関係を理解させる。

#### ウ 産業社会と国民国家の形成

産業革命、フランス革命、アメリカ諸国の独立など、18世紀後半から19世紀までのヨーロッパ・アメリカの経済的、政治的変革を扱い、産業社会と国民国家の形成を理解させる。

#### エ 世界市場の形成と日本

世界市場の形成、ヨーロッパ諸国のアジア進出、オスマン、ムガル、清<sup>しん</sup>帝国及び日本などアジア諸国の動揺と改革を扱い、19世紀のアジアの特質とその中での日本の位置付けを理解させる。

#### オ 資料からよみとく歴史の世界

主題を設定し、その時代の資料を選択して、資料の内容をまとめたり、その意図や狙いを推測したり、資料への疑問を提起したりするなどの活動を通して、資料を多面的・多角的に考察し、よみとく技能を習得させる。

### 【「(4) 諸地域世界の結合と変容」の評価規準に盛り込むべき事項】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程について多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程に関して、その時代に作成された文字資料や図像資料を読み取りたり図表などにまとめたりしている。	16世紀から19世紀までの諸地域世界の結合と変容の過程に関する特色など、基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

【「(4) 諸地域世界の結合と変容」の評価規準の設定例】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<p>・アジア諸地域の繁栄と日本，ヨーロッパの拡大と大西洋世界，産業社会と国民国家の形成，世界市場の形成と日本など，16世紀から19世紀の歴史的事象に対する関心を高め，意欲的に追究しようとしている。</p>	<p>・アジア諸地域の繁栄と日本について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p>	<p>・16世紀から19世紀までの諸地域世界に関して，その時代に作成された文字資料や絵画，風刺画，写真などの図像資料から有用な情報を選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。</p>	<p>・16世紀から18世紀までのアジア諸地域の特質と其中での日本の位置付けを理解し，その知識を身に付けている。</p>
	<p>・ヨーロッパの拡大と大西洋世界について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p>		<p>・16世紀から18世紀までのヨーロッパ世界の特質とアメリカ・アフリカとの関係を理解し，その知識を身に付けている。</p>
	<p>・産業社会と国民国家の形成について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p>		<p>・産業社会と国民国家の形成を理解し，その知識を身に付けている。</p>
	<p>・世界市場の形成と日本について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</p>		<p>・19世紀のアジアの特質と其中での日本の位置付けを理解し，その知識を身に付けている。</p>
	<p>・16世紀から19世紀の歴史的事象に関して，その時代に作成された文字資料や図像資料を多面的，多角的に考察している。</p>		

## (5) 「(5) 地球世界の到来」

### 【学習指導要領の内容】

科学技術の発達や生産力の著しい発展を背景に、世界は地球規模で一体化し、二度の世界大戦や冷戦を経て相互依存を一層強めたことを理解させる。また、今日の人類が直面する課題を歴史的観点から考察させ、21世紀の世界について展望させる。

#### ア 帝国主義と社会の変容

科学技術の発達、企業・国家の巨大化、国民統合の進展、帝国主義諸国の抗争とアジア・アフリカの対応、国際的な移民の増加などを理解させ、19世紀後期から20世紀初期までの世界の動向と社会の特質について考察させる。

#### イ 二つの世界大戦と大衆社会の出現

総力戦としての二つの世界大戦、ロシア革命とソヴィエト連邦の成立、大衆社会の出現とファシズム、世界恐慌と資本主義の変容、アジア・アフリカの民族運動などを理解させ、20世紀前半の世界の動向と社会の特質について考察させる。

#### ウ 米ソ冷戦と第三世界

米ソ両陣営による冷戦の展開、戦後の復興と経済発展、アジア・アフリカ諸国の独立とその後の課題、平和共存の模索などを理解させ、第二次世界大戦後から1960年代までの世界の動向について考察させる。

#### エ グローバル化した世界と日本

市場経済のグローバル化とアジア経済の成長、冷戦の終結とソヴィエト連邦の解体、地域統合の進展、知識基盤社会への移行、地域紛争の頻発、環境や資源・エネルギーをめぐる問題などを理解させ、1970年代以降の世界と日本の動向及び社会の特質について考察させる。

#### オ 資料を活用して探究する地球世界の課題

地球世界の課題に関する適切な主題を設定させ、歴史的観点から資料を活用して探究し、その成果を論述したり討論したりするなどの活動を通して、資料を活用し表現する技能を習得させるとともに、これからの世界と日本の在り方や世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望させる。

### 【「(5) 地球世界の到来」の評価規準に盛り込むべき事項】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用 of 技能	知識・理解
現代世界に対する関心と課題意識を高め、歴史的観点から探究し、21世紀の世界について展望しようとしている。	現代世界について、歴史的観点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	現代世界に関する諸資料を収集し、有用な情報を選択して、読み取ったり図表などにまとめたりしている。	現代世界に関する特色など、基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

【「(5) 地球世界の到来」の評価規準の設定例】

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 帝国主義と社会の変容，二つの世界大戦と大衆社会の出現，米ソ冷戦と第三世界，グローバル化した世界と日本など，現代世界に対する関心を高め，地球世界の課題を，歴史的観点から探究しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 帝国主義と社会の変容について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</li> <li>・ 二つの世界大戦と大衆社会の出現について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</li> <li>・ 米ソ冷戦と第三世界について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</li> <li>・ グローバル化した世界と日本について，多面的・多角的に考察し，その過程や結果を適切に表現している。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現代世界に関する各種の情報や資料の収集・選択・活用などを行い，有用な情報を選択して，読み取ったり図表などにまとめたりしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 19世紀後期から20世紀初期までの世界の動向と社会の特質を理解し，その知識を身に付けている。</li> <li>・ 20世紀前半の世界の動向と社会の特質を理解し，その知識を身に付けている。</li> <li>・ 第二次世界大戦後から1960年代までの世界の動向を理解し，その知識を身に付けている。</li> <li>・ 1970年代以降の世界と日本の動向及び社会の特質を理解し，その知識を身に付けている。</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地球世界の課題に関する適切な主題を設定し，これからの世界と日本の在り方や世界の人々が協調し共存できる持続可能な社会の実現について展望しようとしている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 歴史的観点から，資料を活用して探究し，その成果を論述したり討論したりしている。</li> </ul>		

## 5 評価に関する事例

### (1) 世界史における観点別評価について

今回の改訂に先だって、教育基本法と学校教育法の改正が行われ、学校教育においては、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、主体的に学習に取り組む態度を養うことが規定された。新しい学習指導要領の地理歴史科世界史A及び世界史Bでも、この法改正を踏まえて、「目標」の文言に変更が行われた。

注目される変更点として、第一には、「諸資料に基づき」という文言が新たに加えられたことがあげられる（世界史A、世界史B）。「諸資料に基づき」の意味は、資料の活用を通して世界の歴史を理解することで、「知識基盤社会」と言われる今日の社会の構造的変化に対応していくための思考力・判断力・表現力等の育成を図ることを主な狙いとするものである。本事例（「ヨーロッパの拡大と大西洋世界」）で扱う世界史Bの「(4) 諸地域世界の結合と変容」では、資料の読解に関わる活動（「オ 資料からよみとく歴史の世界」）が新たに設けられるなど、資料の活用を盛り込んだ内容構成となっている。そのため本事例では、改訂の趣旨に則り諸資料から有用な情報を読み取る活動を取り入れるなどの指導上の工夫を行うことにした。評価規準の設定に当たっては、観点別評価の4観点の内、改善されてきたとはいえ、ややもすると「知識・理解」に偏りがちであると批判されてきた高等学校の評価の在り方を見直すとともに、「思考・判断・表現」と「資料活用の技能」に着目して行うことで、思考力・判断力・表現力等の育成においてもその効果が期待できる。また学習の場面においては、定期考査（ペーパーテスト）だけでなく授業中でのワークシートやノートの活用状況、発言内容の観察等を含めた多種多様な方法を設定し評価を行うことによって、指導の改善と一人一人の学習の確実な定着化を図ることが期待できる。

第二には、従前の「目標」では「大きな枠組みと流れ」となっていた文言を「大きな枠組みと展開」と改めることで、世界の歴史を構造的に理解するという趣旨がより一層明確化されたことがあげられる（世界史B）。世界史Bの大項目(4)の「イ ヨーロッパの拡大と大西洋世界」は、世界の一体化の画期となった時代（16世紀から18世紀までの時期）と地域（ヨーロッパの進出によってヨーロッパ・アフリカ・アメリカの間に形成された複合的地域世界としての大西洋世界）を対象としている。そのため、本事例は、「目標」で示された世界の歴史を構造的に理解するという改訂の趣旨が明確に表れており、地球的視野に立って世界の一体化の動きと構造を学習する上で最適な時代と地域であるとともに、「世界の歴史の大きな枠組みと展開」を理解させる上でも有効である。従前、ここでの学習では、世界史上の画期となる時代と地域であるため、生徒には人名、地名、歴史用語など膨大な量の知識・概念の暗記が求められる傾向があり、評価においては「知識・理解」を確認するためのペーパーテストに重きが置かれていた。今回、評価規準の設定に当たっては、世界の一体化という視点から世界の歴史を構造的に理解するという趣旨が明確化されたことを受けて、4観点のうち「知識・理解」に関わる内容の重点化や精選化を図るとともに、「思考・判断・表現」を中心にほかの3観点もバランスよく組込むことで、基礎的・基本的な知識・技能の習得、思考力・判断力・表現力等の育成、学習意欲の向上などを調和的に育むことができる。

以上から明らかなように、新しい学習指導要領の地理歴史科世界史A及び世界史Bは、観点別評価に基づく評価規準を設定することで、改訂の趣旨を反映した効果的な指導を円滑に実施できるばかりでなく、評価の妥当性、信頼性等を高めることも可能になる。また、見え

にくい学力といわれる思考力や判断力を，表現に関わる活動や生徒の作品などを通して可視化することができる。この結果，指導の目標及び内容とリンクした評価が可能になろう。

## (2) 評価規準の設定について

### ① 評価規準の設定における基本的な考え方

4で示した地理歴史科世界史Bの「評価規準の設定例」は，学習指導要領の内容のまとめり（ア，イ・・・の各中項目）を原則的に単元のまとめりとして捉え，単元の評価規準を設定する際の参考となるように作成している。

また，「評価規準の設定例」の作成に当たっては，各学校で作成される評価規準が詳細になりすぎないように，学習指導要領の内容を踏まえて一定の形式に則って表記した。

### ② 評価規準の設定例等の活用

単元において，指導と評価の計画を作成して評価規準を設定する際には，学習指導要領を踏まえて「評価規準に盛り込むべき事項」が作成されている点，また「評価規準の設定例」はさらにそれを演繹的に具体化している点に留意し，活用することが求められる。

**世界史B 事例**

**単元名 ヨーロッパの拡大と大西洋世界**

「(4) 諸地域世界の結合と変容」

**キーワード：**

**思考・判断・表現、  
資料活用の技能の評価**

**(1) 単元の目標**

- ア 16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史に対する関心を高め、意欲的に追究できる。
- イ 16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できる。
- ウ 16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史に関して、その時代に作成された資料から、有用な情報を読み取ったり、図表などにまとめたりすることができる。
- エ 16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史の特色などを理解し、その知識を身に付けることができる。

**(2) 単元の評価規準**

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
・16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史に対する関心を高め、意欲的に追究しようとしている。	・16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史について、多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。	・16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史に関して、その時代に作成された文字資料や絵画などの図像資料から、有用な情報を読み取ったり、図表などにまとめたりしている。	・16世紀から18世紀までの大西洋世界の歴史の特色などを理解し、その知識を身に付けている。

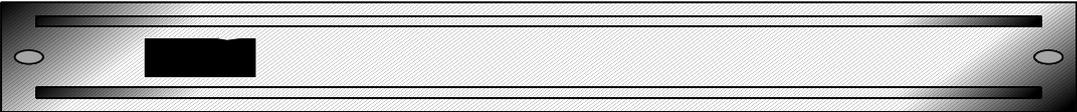
**(3) 指導と評価の計画（7時間）**

曜	学習活動	関	思	技	知	評価規準等
第一 次	【狙い】南蛮船のアジアへの来航を促したヨーロッパ世界の動向について理解させ、単元の学習課題をつかませる。					
（1 時 間 扱 い ）	○「南蛮屏風」には何が描かれているか、気付いたこと、不思議に思ったことをノートにまとめたり発言したりする。 ○南蛮船のアジアへの来航を促したヨーロッパ世界の動向をワークシート1に書き込む。			●		◎絵画をよく観察して、読み取ったことをまとめている。 （ノート、発言内容）  ◎中学校や高校での既習事項を活用し、南蛮船のアジアへの来航を促したヨーロッパ世界の動向

					について理解している。 (ワークシート1)
第 二 次 （ 1 時 間 扱 い ）	<b>【狙い】 封建社会の動揺などを背景におこったルネサンス、宗教改革などの特色について考察させ、その歴史的意義をつかませる。</b>				
	○その時代に作成された資料を活用して、中世とルネサンス期の芸術や宇宙観、宗教改革の内容をよみといたり、ルネサンスと宗教改革の関わりについて共通点と相違点に着目してワークシート2に書き込んだりする。 ○【学習課題①】に取り組む。	●	●		◎古代ギリシア・ローマ時代に立ち戻り人間性豊かな生き方を求めたルネサンスは、やがて、信仰の原点を聖書に求めた宗教改革へとつながったことを整理し、適切に表現している。 (ワークシート2、活動観察) ◎ルネサンス期に、人間や自然に対する合理的な探究活動が始まったことを適切に表現している。
第 三 次 （ 2 時 間 扱 い ）	<b>【狙い】 アジアやアメリカ、アフリカに対する積極的な対外進出により、世界の経済構造は一体化に向けて大きく転換したことを捉えさせる。</b>				
	○アメリカ原産の食材を記したその時代の報告書を読み、現在のどんな食べ物に当たるか推測し、これらの食材が欠かせない身近な料理をノートに記入したり話し合ったりする。 ○新航路開拓にいたる航海の概略や植民活動の展開をノートに記述したり、諸資料からアジアや大西洋世界で起こった変化をよみときワークシート3に書き込んだりしている。 ○【学習課題②】に取り組む。	●	●	●	◎アメリカ原産の食材が世界に普及し、現在の私たちの食生活の一部を支えていることに気づき、関心を高めている。 (ノート、話し合いの様子) ◎航海の概略や植民活動の展開を整理し、諸資料から世界の一体化に伴うアジアや大西洋世界の変容の様子をまとめ、適切に表現している。 (ノート、ワークシート3) ◎国際的な銀の流通が世界の一体化を促す原動力となったことについて考察し、表現している。
	<b>【狙い】 ヨーロッパの主権国家体制の特色を考察させ、その形成と展開について理解させる。</b>				
	○地球儀を活用して、ヨーロッパの位置や地理的特色について確認しながら、16世紀以降のヨーロッパの国際関係の課題をノートに記述したり発表したりする。	●			◎ヨーロッパはユーラシア西端の半島に位置し、多くの国家が集まっているという地理的特色をつかむとともに、16世紀以降には、国際関係を調整するための

<p>第四次 （2時間扱い）</p>	<p>○重商主義に基づく経済活動と植民地争奪戦争がヨーロッパ内外で展開されたことに着目して、ヨーロッパ諸国の覇権の推移や東ヨーロッパ諸国の動きなどをノートに記述する。</p> <p>○【学習課題③】に取り組む。</p>	<p>●</p>	<p>外交や国際法の発達をみたという国際関係の課題を考察し、適切に表現している。</p> <p>（ノート，発言内容）</p> <p>◎ヨーロッパ諸国の覇権の推移や東ヨーロッパ諸国の動き，植民地争奪戦争の経過と結果などを整理し，主権国家体制の特色を理解している。（ノート）</p> <p>◎ヨーロッパの主権国家体制の特色を，中世ヨーロッパの封建国家体制や中国の冊封体制と比較し，適切に表現している。</p>
<p><b>【狙い】ヨーロッパの主権国家体制を背景に形成された文化の特色を考察させ，この時代を総括し次の時代を展望させる。</b></p>			
<p>第五次 （1時間扱い）</p>	<p>○その時代の作品から，王侯貴族による宮廷文化と，商業活動の活性化がもたらした市民文化の特色をワークシート5に記述する。</p> <p>○第一次から第五次までの学習内容を踏まえ，この単元で学んだ世界史の動向を特色付けるタイトルを考え，ワークシートに書き込む。</p> <p>○これまでの学習を踏まえ，18世紀後半以降の新たな世界史の課題を推測し，その結果をワークシート6に書き込み，次の時代の学習への取組について意見交換する。</p>	<p>●</p> <p>●</p> <p>●</p>	<p>◎主権国家体制と商業活動の活性化が特色ある文化を生み出したことを読み取っている。</p> <p>（ワークシート5）</p> <p>◎時代を概観してその特色を表すタイトルを自分の言葉で表現し，学習意欲を高めている。</p> <p>（ワークシート）</p> <p>◎18世紀後半以降の世界史の動向を展望し，次の時代の学習への取組について自分の言葉で表現し，学習意欲を高めている。</p> <p>（ワークシート6，活動観察）</p>
<p>事後</p>	<p>○単元終了後に実施される定期考査（ペーパーテスト）に取り組む。</p>	<p>●</p> <p>●</p> <p>●</p>	<p>◎16世紀から18世紀までの大西洋世界の特色を多面的，多角的に考察し，適切に表現している。</p> <p>◎16世紀から18世紀までの大西洋世界に関して，その時代に作成された諸資料から有用な情報を読み取っている。</p> <p>◎16世紀から18世紀までの大西洋世界の特色を理解している。</p> <p>（上記3項目，ペーパーテスト）</p>

**参考資料** 「ヨーロッパの拡大と大西洋世界」ワークシート例

	関	第五次						
<p>■ 1 南蛮船のアジアへの来航を促したヨーロッパ世界の動向は何か？</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; display: inline-block; width: 300px; margin-bottom: 5px;"></div> <span style="margin-left: 20px;">⇒</span> <div style="border: 1px solid black; padding: 2px 5px; margin-left: 10px;">アジア</div>	技・知	第一次						
<p>■ 2 ルネサンスと宗教改革は、どう関わり合っているか？</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tr> <td style="width: 33%; text-align: center;">ルネサンス</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">宗教改革</td> <td style="width: 33%; text-align: center;">対抗宗教改革</td> </tr> <tr> <td style="height: 20px;"></td> <td></td> <td></td> </tr> </table> <p>【学習課題①】 問：「コペルニクスの転回」という言葉が持つ意味を考えてみよう。これまで世界史で学んだことから、この言葉がぴったり当てはまると思う歴史事象を取り上げて説明してみよう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-between; margin-top: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">意味</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: 45%;">歴史事象</div> </div>	ルネサンス	宗教改革	対抗宗教改革				思	第二次
ルネサンス	宗教改革	対抗宗教改革						
<p>■ 3 新航路開拓によってアジアや大西洋世界はどう変わったか？</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> <span>&lt;ヨーロッパ&gt;</span> <span>&lt;アメリカ&gt;</span> <span>&lt;アフリカ&gt;</span> <span>&lt;アジア&gt;</span> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 20px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 150px; height: 20px;"></div> </div> <p>【学習課題②】 問：16世紀、大西洋、アジア海域、太平洋を舞台にした商品のやりとり（交易関係）をまとめよう。その交易関係から、世界をつなぐ原動力となったこと（もの）は何か、考えてみよう。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px; min-height: 30px;"></div>	関・思	第三次						
<p>■ 4 主権国家体制の特色は何か？</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px; min-height: 30px;"></div> <p>【学習課題③】 問：これまでの学習から、ヨーロッパの主権国家体制は、中世ヨーロッパの封建国家体制や中国の冊封体制とどのように違うのだろうか、整理してみよう。</p> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 5px;"> <span>&lt;封建国家体制&gt;</span> <span>&lt;冊封体制&gt;</span> <span>&lt;主権国家体制&gt;</span> </div> <div style="display: flex; justify-content: space-around; margin-bottom: 10px;"> <div style="border: 1px solid black; width: 200px; height: 25px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 200px; height: 25px;"></div> <div style="border: 1px solid black; width: 200px; height: 25px;"></div> </div>	思・知	第四次						
<p>■ 5 宮廷文化と市民文化の特色は何か？</p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse; margin-top: 10px;"> <tr> <td style="width: 50%; text-align: center;">宮廷文化</td> <td style="width: 50%; text-align: center;">市民文化</td> </tr> <tr> <td style="height: 20px;"></td> <td></td> </tr> </table>	宮廷文化	市民文化			技・関	第五次		
宮廷文化	市民文化							
<p>■ 6 18世紀後半以降の世界史の展開について、想定できる動きをまとめよう！</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px; min-height: 30px;"></div>								

## (4) 観点別評価の進め方

ア 本事例では、学習の狙いや内容に即して、成果が得られているかどうかをスモールステップで生徒に自己評価させるために、学習課題(ワークシートに記載した学習課題①～③)を設定した。この学習課題は、既習事項と現在の学習事項をつなぎ、学び直しの必要性を生徒に気付かせたり、諸地域世界で形成された歴史事象の比較を通して世界史の大きな枠組みや展開について考察させたりするために、教師が設定した「問い」である。各次程において、この学習課題に取り組みさせることで、生徒は自らの習得レベルを把握し、教師は個に応じた適切な学習支援の方針をつかむことができる。

イ 第一次から第五次までの各次程で観点別評価の全ての観点を網羅的に組み込むと、評価そのものが総花的、形式的なものになり、各次程で指導すべき内容が曖昧となる。その結果、生徒の学習を支援するためのものとしての評価の役割が十分に機能し得なくなる。そのため、本事例では、各次程で設定する観点は、定期考査を除き、原則として1観点ないし2観点到留める。また、本事例で扱う「(4) 諸地域世界の結合と変容」の学習では、「オ 資料でよみとく歴史の世界」(新項目)の内容を入れて、生徒にその時代の資料を多面的・多角的に考察させ、資料をよみとく技能の習得を求めている。よって、4観点の内「資料活用の技能」と、諸資料からよみといた情報を比較したり関連付けたり、考察した過程や結果を適切に表現したりする学習活動(「思考・判断・表現」)を評価の中心に据えて指導することとする。

ウ 本事例では、ワークシートの活用を重視している。その理由として、第一に、ワークシートは授業の狙いや意図を生徒にあらかじめ明示することができ、学習の達成状況を評価する際に重要な資料となり得るためである。第二に、ワークシートの活用状況から、教師が個々の生徒のつまずきや習得レベルを把握しその後の指導に活用できることや、生徒自身が本事例の学習について自己評価したり、他生徒との相互評価を行う際の資料としても活用できるためである。

エ 各観点ごとには、次の点に留意した。

### ①「関心・意欲・態度」について

この観点については、学習の深まりにつれて関心・意欲が高まっていくという面に留意し、比較的長期のスパンの中で評価を行うことや、単元末における世界史への関心や学習意欲の高まりを重視して評価していくことが肝要である。また、この観点の評価に当たっては、授業中の行動や発言内容の観察、ワークシートを活用して行う学習課題の取組状況など、様々な学習場面において実施していくなどの工夫が必要となろう。

本事例では、第三次の活動から一体化に向かう世界の動きを自らの食生活との関わりから関心をもって受け止めているか、第五次の活動から次の時代の学習に意欲的に取り組もうとしているかなど、指導と評価の狙いに即して評価する。例えば、第五次のまとめ学習において、次のような具体的な評価活動や指導の手立てが考えられる。

#### 【評価規準(関)】

時代を概観してその特色を表すタイトルを考えたり、18世紀後半以降の世界史の動向を展望し、そこで生まれる新たな課題や次の時代の学習への取組について自分の言葉で記述

したりして、学習意欲を高めている。

【「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる生徒の主な記述内容】

○タイトル：「アジアの物産を求めた国際紛争の時代」

○前の時代は、ローマ教皇が力を持っていたが、経済力と軍事力を持つ国王が実権を持つようになった。国王同士の争いがこれまで以上に激しくなってきたので、さらに国際紛争が起こる。どんな紛争が起こるのか。

【「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒の記述例】

植民地争いでは、最終的にはイギリスが勝利したが、その理由は、二度の革命により議会制度が整備されたことにあると思う。ただ、選挙権は地主しかもっていなかったの  
で、次は、ほかの人にも選挙権が広がるのではないか。また、このイギリスの勝利に学  
び、ほかの国でも議会制度の確立のための動きが出てくると思う。私は、このあたりの  
動きを学習したい。

（ワークシートのタイトル欄への記述：「物の交換でつながる世界・変わる地域」）

【「努力を要する」状況（C）と判断した生徒とその指導の手立て】

生徒は、ノートやワークシートに丁寧に記述しているものの、時代を展望する大きな見  
方ができないので、自分なりの取組の方針をたてることができない。

生徒には、既習事項の中世ヨーロッパと比較させ、この時代が変わった点と変わらな  
かった点を考えさせたり、今日の社会と違っている点や共通している点を探させたりして、  
時代を概観するための着眼点を明確にして取り組むよう指導する。

②「思考・判断・表現」について

この観点については、歴史事象の因果関係や共通点・相違点、その時代背景などにつ  
いて思考・判断した過程や結果を、記述や発言内容、意見交換などの言語活動を中心とした  
表現と一体的に評価することが求められる。見えにくい学力といわれる思考力や判断力を、  
表現に係る活動や生徒の作品などにより可視化し、評価規準などと照らし合わせることで  
背後にある思考力や判断力を把握していく必要がある。

本事例では、(4)イに示したとおり、この観点の評価を重点的に行う。主な評価場面は、  
この単元の中核を構成する第二次から第四次までと定期考査（ペーパーテスト）である。  
また、(4)アに示した趣旨で、形成的評価の一環として行う学習課題の取組状況からも把  
握した。これを活用して、生徒に自己評価させたり、適宜相互評価も取り入れたりするこ  
とで学習意欲を喚起していく。例えば、第二次と学習課題③（第四次）の取組において、  
次のような具体的な評価活動や指導の手立てが考えられる。

第二次「ルネサンスと宗教改革の関わり」

【評価規準（思）】

古代ギリシア・ローマ時代に立ち戻り人間性豊かな生き方を求めたルネサンスは、やが  
て信仰の原点を聖書に求めた宗教改革へとつながったことを整理し、適切に表現している。

【「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる生徒の主な記述内容】

- 共に宗教の存在を前提としつつ、ルネサンスは教会の在り方まで話題にすることはなかった。宗教改革は、教会の在り方を批判した。
- 宗教改革は、信仰のより所をめぐる問題を訴えた。ルネサンスは、人間的な信仰の姿を描いた。共に、キリスト教を前提にした改革である。

【「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒の記述例】

共通点は、共に宗教が生活に深く根付いていることで、原点に戻って個性や内面の自由を追究したことである。相違点は、ルネサンスは、古代ギリシア・ローマ時代の文化に学び人間性豊かな生き方を芸術活動の中で求めたのに対して、宗教改革はこれを日常的な信仰の問題につなげ、教会体制を批判したことである。

【「努力を要する」状況（C）と判断した生徒とその指導の手立て】

生徒の記述は、共に聖書を題材にしたこと、教会体制の批判の有無のみを取り上げて、両者の関わりに触れず表面的な内容にとどまった。

生徒には、ルネサンスは当初教皇の保護により始まったものの、その後、教会が文化規制を強めたのはなぜかなどの問いかけをして、両者のつながりを考察させた。

第四次（学習課題③）「これまでの学習から、ヨーロッパの主権国家体制は、中世ヨーロッパの封建国家体制や中国の冊封体制とどのように違うのだろうか、整理してみよう。」

【評価規準（思）】

ヨーロッパの主権国家体制の特色を、中世ヨーロッパの封建国家体制や中国の冊封体制と比較し、適切に表現している。

【「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる生徒の主な記述内容】

- 中世では、貴族は不輸不入権を持ち、国王の介入を阻止できた。中国では、周辺諸国の国王が中国の皇帝に仕える君臣関係がつけられた。主権国家体制では、国王が主権者で、絶対的な権力を持ち、他国の介入を阻止した。
- 中世では、土地のやりとりで主君と臣下との間に契約関係が結ばれた。中国では、周りの国の国王が中国皇帝から位をもらい、主従の関係を結んだ。主権国家においては、国王に全権を渡し他国と外交関係をつくるのが大切となった。

【「十分満足できる」状況（A）と判断した生徒の記述例】

中世ヨーロッパの場合は、人と人との複雑な主従（契約）関係により成り立ち、国王の権力も貴族の荘園内には及ばない。中国の場合は、文化の中心である中華に対して周辺の国が仕える体制であった。これに対して、ヨーロッパの主権国家体制は、国王が絶対的な権力を持っていて、そのことを国王同士が認めているので理由のない身勝手な介入ができないこと、更に教皇権からも自立していることに特色がある。

#### 【生徒の自己評価の記述例】

ほかの人の記述から、この時期のヨーロッパは、国王同士がお互いに主権者であることを前提に行動したので、以前より外交活動が重要な時代になったと思った。中世のように、複雑な人間関係や契約関係があると国王はやりにくいし、東アジアでは対等な立場での交渉はできないだろう。今は国民主権だが、国王から国民に主権が移るきっかけは何か興味がわいた。

#### ③「資料活用の技能」について

この観点は、歴史事象に関する文字資料や図像資料から有用な情報を収集・選択して、その内容や意味を読み取って、図表などに自分の言葉でまとめる技能を取り扱う。この観点は「思考・判断・表現」と深く関連しているが、読み取った情報を比較し関連付けたり、その意味や意義を解釈したり、考察した結果を表現したりする活動については、「資料活用の技能」ではなく「思考・判断・表現」で評価する。

本事例では、第一次、第五次と定期考査（ペーパーテスト）を評価場面として位置付けたが、ワークシートの取組とノートの活用状況との関連にも留意する。なお、本事例では、「資料活用の技能」と「思考・判断・表現」を評価の中心に据えたことは、既に、(4)イで述べたとおりである。

#### ④「知識・理解」について

この観点は、世界史学習において習得すべき知識や概念を生徒が身に付けているかどうかを判断するものである。単に獲得された知識の量を評価するのではなく、思考・判断・表現活動との関わりから、獲得した知識を活用したり意味付けたり、そのことを表現したりする学習活動が、知識や理解の定着をさらに促すことにも留意する。

本事例では、第一次、第四次と定期考査（ペーパーテスト）を評価場面として位置付けたが、ワークシートを活用して行う学習課題の取組状況との関連にも留意し、総合的に判断する。なお、定期考査（ペーパーテスト）については、ほかの観点（「思考・判断・表現」、「資料活用の技能」）も視野に入れて出題することとするが、「知識・理解」の観点の主要な評価場面として位置付ける。

### （5）観点別評価の総括

世界史Bでは、「歴史の大きな枠組みと展開」を理解させることが大切である。第一次は中学校社会科歴史的分野での内容を高等学校地理歴史科世界史Bの学習につなぎ、単元の学習に見通しを持たせる時間として、第二次から第四次までは「(4) 諸地域世界の結合と変容」の具体的諸相とこの時期の構造的変化を学習する時間として、最後の第五次は本単元の学習を総括しこの時代に形成された世界史の枠組みが次の時代にどう展開するか推測する時間として、位置付けている。

観点別評価の総括は、学習内容の大きな枠組みを示したワークシートの取組状況と定期考査（ペーパーテスト）の結果を中心にして、これにノートや発言内容、意見交換や学習活動の観察などを加味して総合的に行う。本事例で扱う「(4) 諸地域世界の結合と変容」の学習では、(4)イに示したとおり、その時代に作成された資料を多面的・多角的に考察させるなどの、

資料をよみとく技能の習得を求めている。したがって、本事例では、「思考・判断・表現」と「資料活用の技能」の観点を重点的に評価した。本事例における観点別評価の総括については、次に示したとおりである。

次 程	関心・意欲・態度		思考・判断・表現				資料活用の技能			知識・理解		
	第 三 次	第 五 次	第 二 次	第 三 次	第 四 次	考 査	第 一 次	第 五 次	考 査	第 一 次	第 四 次	考 査
生徒X	B	A	A	B	A	A	B	A	B	A	A	B
生徒Y	A	B	B	A	B	B	A	B	A	A	B	A
生徒Z	C	B	B	A	A	A	B	B	C	B	B	A

- 各観点は、各次程の評価状況を踏まえ、「A」、「B」、「C」などの分布状況から総括した。
- 「関心・意欲・態度」の観点は、評価場面が二つであることから、学習の深まりにつれて関心・意欲が高まっていくという面に留意し、第五次を重視して総括した。
- 「思考・判断・表現」と「資料活用の技能」の観点は、ワークシートの取組状況や定期考査（ペーパーテスト）の結果を中心に、各次程でのノートや発言内容、意見交換や学習活動の観察などを加味して評価した。「(4) 観点別評価の進め方」で示した評価の重点化の方針を踏まえ、ワークシートの取組状況（「思考・判断・表現」の場合は第二次から第四次まで、「資料活用の技能」の場合は第一次と第五次）を重視した。
- 「知識・理解」の観点は、第一次、第四次、定期考査の場面で評価した。「(4) 観点別評価の進め方」で示した評価の方針を踏まえ、定期考査（ペーパーテスト）を主要な評価場面として位置付けたことに留意し、定期考査の結果を重視して総括した。

【以下、第3章日本史B、第4章地理B:略】